会報
42号

函館の歴史的風土を守る会会報
No.42　H 4. 10. 20
発行所　函館の歴史的風土を守る会
事務局　函館市五稜郭町４３－９
五稜郭タワー株式会社内
電話 (0138)51－4785
印刷所　双葉印刷 電話 53－7730番

《横濱水際会議》

'92 全国ウォーターフロント・サミットに出席して

工　藤　光　雄

「自然を生かした人にやさしい街をめざして」＝寄せる波・流れる水の音・色・匂いなどには、そのまま自然のうつろいが感じられる。水は自然そのものである＝のテーマの下に、9月5日第5回ウォーターフロント・サミットが横濱市開港記念会館を会場に開催された。

小樽、函館、青森、船橋、東京(3)、横浜(2)、新潟(3)、舞鶴、大阪、神戸(2)、福岡、柳川、長崎(2)、宮崎、沖縄から27の市民グループが参加した。

【プログラム】

◎第１部　野外シアター

「丘」「海」「川」「街」の４グループにわかれて市内見学

◆「丘」のコース

開港の歴史を見守ってきた山手の丘、今に残る歴史的建造物を散策しながら丘から見る、横浜の水際体験

◆「海」のコース

経済、生活、遊び、原風景と様々な装いを持つ港を船にのって海から見る横浜の水際体験

◆「川」のコース

街の中に季節感や潤いをもたらし、新しい発見を呼び起こす舞台となる、川から見る水際体験

◆「街」のコース

横浜都心部の関内周辺を水際を意識したまちづくりとはの疑問を持ちながら、街から見る横浜水際体験

◎第２部　開港館シアター

プロローグ　基調講演“水都の再生”
―生活と文化の視点から―
講師　陣内秀信 氏（法政大学教授）

幕間劇　映画「追憶の水迷宮」横浜のひと・人
製作　横浜井戸端会議

（横浜の都心部の川や運河、そして港に係わって生きている人々の横浜に対する思いを中心に据えた映画）

第１幕　テーマ「残」（保存）

1. 東京湾の最奥に位置する我街船橋には、東京湾に唯一残った自然の“干潟”がある。ここに再度埋立計画が浮上した。干潟は今も海水浄化、サカナの産卵、生育場として自然界の営みを繰り返している。湾岸に住む市民にとって最もふさわしい姿を求めて活動している。（船橋市　船橋の海を愛する市民会議）
2. 明治・大正期に旧海軍が残した建造物赤煉瓦倉庫群を歴史的な建造物として調査に乗り出し、日本で現在４基しかないホフマン窯の存在や12棟もの倉庫群が当時のまま使用されているのが判明した。又市所有の２棟が「赤煉瓦博物館」「市政記念館」に再活用される予定で、港まちらしい景観形成になり運動を進めている。（舞鶴市　赤煉瓦倶楽部舞鶴）

第２幕　テーマ「造」（開発）

1. 昭和62年３月、博多湾西部に埋立てられた人工海浜に松原の復元を提唱し、広く市民に呼び掛け、行政と関わって松の植栽運動を始めた女性を中心としたグループが「はかた夢松原の会」で５年間で１万本を植樹、今２万本を目指して保全と環境を考えながら緑を広げて行きたいと願っています。（福岡市　はかた夢松原の会）
2. 様々な分野のエキスパートが参画して、まちづくり株式会社アーバンブラニングを設立して５年になる。新潟市の都市景観調査基本計画策定や県内の景観・指針づくりなど様々な仕事をやらせていただいております。環日本海の拠点として一層発展するため、地域の仲間の力を集合させることが必要だと思います。（新潟市　まちづくり株式会社アーバンプラニング）

第３幕　テーマ「生」（再生）

1. 河川行政マン、川のコンサル、学者や教師、ナチュラリスト、地域活動家、企業のボランティア等20数名でスタート。現在では川を愛し、まちを愛する高齢者や主婦、そして学生の参加を得ている。高度成長、流域の急速な都市化や高度消費時代の犠牲となり、殺風景な放水路、ドブ川と化した鶴見川を、①泳げるような、釣った魚が食べられる、イキイキと元気な川に再生し、②さわやかな川のある魅力的な流域のまちを創りたい。ゆたかな自然・歴史・文化があり、うるおい・やすらぎ・アメニティを求め、今都市がかかえる問題と可能性を考え、勇気ある実践を進めています。（横浜市　鶴見川を愛する会）
2. 函館の歴史的風土を守る会は、歴史的遺産、文化財及び文化財に相応する建造物の保存・保護・再生活用を計るべく運動、行政に対し積極的にアピールを、市民に対しては理解と協力を求めて来た。その成果は景観条例の制定があり、ウォーターフロントの整備、建造物の再生活用へと発展し今日に至っている。（函館市　函館の歴史的風土を守る会）

エピローグ　全国から集まった市民団体によるパネルデスカッション

テーマ「水際都市ヨコハマ」に対する提言などがあり盛会裡に終了しました。

1993年全国ウォーターフロント・サミット開催地は福岡に決定しました。（事務局長）

函館市旧イギリス領事館(開港記念館)の整備について

池　田　敏　春

－はじめに－

函館市の元町公園地区には、旧函館区公会堂などの貴重な文化財建造物が数多く所在し、それぞれが保存修理を終え往時の姿を誇っています。また、当地区は、伝統的建造物群保存地区として伝建物の保存活用や、景観特性をいかした町並みの形成が進められており、これらにより地区全体が歴史的文化的エリアとしての熟成をみているところとなっています。

当地区に所在する旧イギリス領事館は、大正２年イギリス政府工務省上海工事局の設計により建てられ、我が国北辺の外交や、海外貿易などに係わる歴史の証として貴重な遺構であることから、昭和54年11月には函館市の有形文化財として指定されています。

しかし、建築後70有余年を経過し、老朽化が著しく、当地区にあっては唯一の未整備建造物となっていたことから、箱館開港の歴史的文化的意義を伝える「開港記念館」として再活用を図り、もっと当地区特有のものといえるべき魅力をさらに増進することを目的として整備が企画され、平成２年度からの３か年に亙る保存修理を終え、このたび函館市制施行70周年の記念すべき日にあたる本年８月１日「函館市旧イギリス領事館（開港記念館）」として開館に至りました。

－変遷－

この建物は、昭和９年には領事館としての機能が廃止されますが、その後昭和15年に市が買収、市立函館病院の職員住宅や看護婦寄宿舎として使用され、また終戦の年には憲兵隊の庁舎として接収、戦後は再び寄宿舎や仮病棟、また倉庫として使用されるなど、幾多の変遷を重ねることとなりました。

－調査－

文化財の修理にあたっては、創建時の状況を明確にする必要があるということはいうまでもありませんが、これを解き明かすための手法としては、第一に解体調査を行い痕跡等から建物の変遷を推察すること、次にこれを古写真や当初設計図と照合し、確定させていくという地道な作業の反復による考察が重要となります。

この手法により調査を実施した結果、内部については前述のとおり幾多の使用形態の変遷を経た結果、間仕切り等が大きく変更されており、特に使用人居室として使用されていた西棟については全面的に改修され、ほとんど原形をみない状況にあることが判明しました。

しかし、領事館機能の中枢ともいえるべき領事執務室、領事居室等として使用されていた主棟については、一部間仕切りの変更がみられるものの、ほぼ原形を留めていること、また外観についても、昭和43年の十勝沖地震の際、屋根がトタンに葺替えられたという以外は、特に改変は見られないことが判明しました。

－保存と活用－

この調査結果をふまえ、「旧イギリス領事館」の保存修理と「開港記念館」としての活用について検討が重ねられ、以下のとおり整備の企画が立案されました。

建物外観については、カラートタン屋根を当初の桟瓦葺きに復する。また、風雨・降雪棟によりき損の著しい建物中庭については、ガラス屋根の覆い屋を増築し、建物の保存性と各棟間の連結性を高める。

建物内部は、創建当時の状況をよく留めている主棟は当初仕様に復し、家具調度品等により領事館当時の執務状況等を再現するとともに、レストラン・喫茶、また研修室（貸し会議室）等の機能を持たせ、旧外国公館の雰囲気を利用者が実体験できる空間とする。

領事館職員居室として使用され、独立した棟となっていた東棟については、変更が著しい間仕切りをできるだけ当初に復し、厨房や会議室として再利用する。

また使用人の居室として使用され、同じく独立した棟となっていた西棟については、間仕切りはもとより原形を留めないほど改変されていたことから、当初への推定復元はせず、展示室として再利用する。

上記方針により、係る指定文化財の現状変更行為について市教育委員会へ申請、文化財保護審議室への諮問・答申、許可を経て、平成２年12月整備に着手。

公会堂やハリストス正教会、また札幌の豊平館（重文）の漆喰塗りを手掛けた伝統的技能の保持者や、数多くの重文にカーテン等を納品している織物業者など、文化財修理に精通した面々による地道な手作業を経て工事は確実に進められ、平成４年７月、３か年の整備事業が完了し、このたび永く閉ざされていた扉が、再び開かれることとなりました。

なお、この工事内容について、次によりその概要をお知らせいたします。

竣　工　外　観

竣工玄関廻り

展　示　室

－工事の概要－

外部　建物外構の遺構調査　　復元の基礎資料を得るため、建物周囲部の発掘調査を実施した。この結果、軒先沿いに敷設されていた雨落し石と、排水系統を確認することができた。また、桟瓦（当初屋根材）の出土により、この形状および寸法を確定できた。

基礎　　基礎は、前代の領事館（明治16年頃現在地にて竣工・明治40年の大火により石階を除き全焼）の基礎をそのまま使用している。

解体調査により、土間・基礎の形状は、現在の平面と若干異なっているのが確認された。

外壁　　当初外壁仕様は、煉瓦造壁体にモルタル塗り下地・漆喰塗り仕上げとなっていたが、現状は、この表面にドロマイトプラスターで補修されていたことから、これを高圧水により除去し外壁の洗浄を行った。

修理にあたっては、漆喰の残存部分はそのままにし、その上に塗り重ねることで、建物の歴史を確認する証拠となるものを残した。木ゴテでの施工により、当初と同様の仕上げ程度となった。

屋根　　鍬取り調査を実施し、瓦材の形状・寸法を特定した（和型粘土瓦・桟瓦295×295㎜）。

修理に際しては、下地を構造用合板で調整し、当初の状態に葺上がるように想定した。製法は、還元焼成法による釉薬瓦とした。

内部　床　　ほとんどの床は、ヒバフローリング張り下地ヒバ材の２重張りとなっていた。

修理にあたっては、フローリングと下地板材の腐朽・後補部分は撤去し、当初の張り方に倣うこととした。

壁　　１・２階ともに、煉瓦下地または木摺下地の上、漆喰塗りとなっていたが、その上に塗装または紙張り仕上げとなっている部分もあった。

修理にあたっては、漆喰塗りの状態が良い部分は残し、劣化の著しい部分は撤去し補修した。

天井および蛇腹　　天井部分は、２階梁に直接木摺を打ち付ける工法で施工されており、振動が直接木摺に伝達される構造となっていたことから、傷みが著しく、残存部分は極く小面積にとどまっていた。

修理にあたっては、蛇腹など比較的残存部分が多いものについては、当初部分Ｖカット・ビス止め補修により留め付け、カゼインによる化粧直しを行った。

塗装　　外部の鼻隠し板の当初材に、青色顔料で着色された部分が発見されたため、これを分析調査するとともに、全面のケレン作業による確認を行ったところ、鼻隠し板・軒天井材・建具および建具枠等の全面最下層に、同顔料の使用が確認された。また、その他の塗装部分についても同様に解明することができた。

顔料が特定されたため、当初材料とほぼ同一の材料、同一仕様の塗装を実施することができた。階段部分は、着色ワニス塗りで、当初と同様の塗装色となった配合のもので補修した。補修は現状を清掃した後、塗り重ねることとし、剝離作業による新規塗装は避けることとした。着色ワニスは胡粉と顔料を合わせて下塗りと吸い込み止めとし、中塗り・上塗りはワニス塗りとほぼ同様の仕様とした。

建具・建具金物　　現状を調査し、当初建具と後補建具、当初建具の後補部分、建具金物を分類整理し、後補部分を確定させた。

修理にあたっては、腐朽・欠損部分は補修したが、ねじれ・反り等があるものは、締め直しを基本とし、変形の著しいものについては、材の取替えを行った。全欠損のものについては、古写真と現状建具により考察し、復旧した。その他の復元建具も同様の方法で復旧した。建具金物は、当初・後補の判断が出来ないものも多かったが、これらはすべて元の位置に取り付け、欠損等があるものについては同仕様にて復元した。

カーテンおよび吊り装置　　現存部分は、木製のロット受けのみであったことから、ロット・裂地のデザインにあたっては、建物の形状や意匠が同時代の建物等と比較検討し、簡素で比較的装飾を排したものとした。

研　修　室

－おわりに－

おかげさまで８月１日の開館以来、入館状況、喫茶等の利用状況とも、まずまずのすべり出しをみており、特に研修室（貸し会議室）については、当時の雰囲気を気軽に楽しめる空間として好評を博しております。

今後、会合等をご予定されている会員の皆様方におかれましては、領事館の見学とあわせ、この研修室のご利用につきましてもご一考いただければ幸いです。

（定員15名程度・軽食やお茶等の対応可）

〈申し込み・問い合わせ〉　エイコク

函館市旧イギリス領事館（開港記念館）0138-27-8159

（函館市商工観光部観光課主事）

函館の街の「近代化遺産」

伊藤　孝

１．「近代化遺産」

「近代化遺産」という言葉をご存じだろうか？

これは、産業・交通・土木など、近代化をになった各種の構築物や建造物のことをさす。たとえば、ダムや橋・トンネル・港湾などの土木遺産、造船所や鉱山・製鉄所・製糸工場・煉瓦製造工場などの産業遺産とともに、施設とかかわりのある設備・機械・家具・備品類や機関車・車両・自動車なども一体的にふくむことが特徴だ。

わが国では、単体としての建物の保存については、戦前からおこなわれていたが、古い町並みなどの保存については、市民運動のバックアップがあって、昭和50年からようやく文化財保護法でも対応がはかられるようになった。しかし産業遺産や土木遺産については、対応が遅れていた。全国にどのようなものが残されているのかも、わからないのが実情である。

白　河　橋

そこで文化庁では、二年前から「近代化遺産総合調査」をスタートさせ、まず最初は秋田・群馬・福岡などで調査が行われ、興味深い調査結果が得られている。北海道でも、この調査にむけて除々に準備がおこなわれているようだ。

２．「全国的にも貴重な石造アーチ橋の白河橋」

下田とともに、わが国最初の開港場である函館は、街全体が大きな近代化遺産といえる。しかし近代化をになった建造物となると、数は限られてくるのではなかろうか。

五稜郭や四稜郭は、典型的な近代化遺産だが、すでに国の特別史跡として、それぞれ保護がはかられている。

わたしは、個人的な関心から各地に残る土木遺産を10年くらい前からめぐり歩き、文化庁の近代化遺産の準備調査にもかかわってきた。函館にも来たことがある。

函館での関心は、水道ダムとしては唯一のバットレス・ダム（扶壁式ダム：巨大な堰板を支えるようなダムのこと）である笹流れダムやわが国で二番目の近代上水施設を見学することだった。そうこうするうちに最近知ったことは、函館公園にある眼鏡橋である。

明治14年８月に竣工した白河橋は、地元では「北海道最初の洋式石橋」として知られる（『函館公園』函館市役所土木部）。橋の構造は、九州によく見られる石積みのアーチ橋なので「洋式」とはいいがたいが、手摺りが鉄なので「洋式石橋」とよんだのだろうか。

公園内の橋なので、橋は小振りで、反りがきつい。石橋の手摺りは、ふつう石でつくられたものが多いが、白河橋のは、細い石の間柱に鉄を通したものなので、全体的に軽くあっさりした印象である。間柱がまっすぐ垂直に立つのではなく、放射方向（橋面に垂直）に設置されているのも面白い。

北海道の石造アーチ橋という事実に着目してみると興味深いことがいくつか浮かんでくる。

まず竣工年月。これは、「北海道最初の石造アーチ橋」と考えられるし、北海道に石造アーチ橋のあることは、専門家の間でもあまり知られていない。

石造アーチ橋の技術は、九州地方を中心にして17世紀ごろより存在したが、その技術が広まるには明治維新を待たねばならなかった。それまでは、技術の奥義を他にもらさぬためわが子の一人だけに伝える。“一子相伝”の考えから、アーチ技術は全国に広がらなかった。

明治維新になって、そのような考え方がとりはらわれ、アーチ橋を架設する制限はなくなったが、実際に架橋できるところは限られた。アーチ橋を架設するには、お金も必要だし、架橋技術者の石工をよびよせるネットワークもないと駄目だからだ。

最近出版された山口祐三氏の『石橋は生きている』（葦書房）の巻末にある資料から、白河橋を位置づけてみると、次のようになる（白河橋は、リストに掲載されていない）。

明治時代に架設された石造アーチ橋は、全部で72（ただし九州を除く）。そのうち明治14年までに架設

された橋は、半分の36である。２橋をのぞくと、京都・東京の旧首都か新首都、および鬼県令といわれた三島通庸が赴任した山形・福島に限られているのである（表－１）。

三島通庸は、五大石橋で有名な鹿児島県の出身。地域経済が発展するには、道路網の整備が必要と考え三島通庸は、道路づくりに励むとともに、すぐに壊れる木の橋ではなく、九州から石工をよんで長持ちする石橋をつくらせた。木橋に対して石橋は「永久橋梁」とよんだことからも、橋に対する期待がうかがわれる。

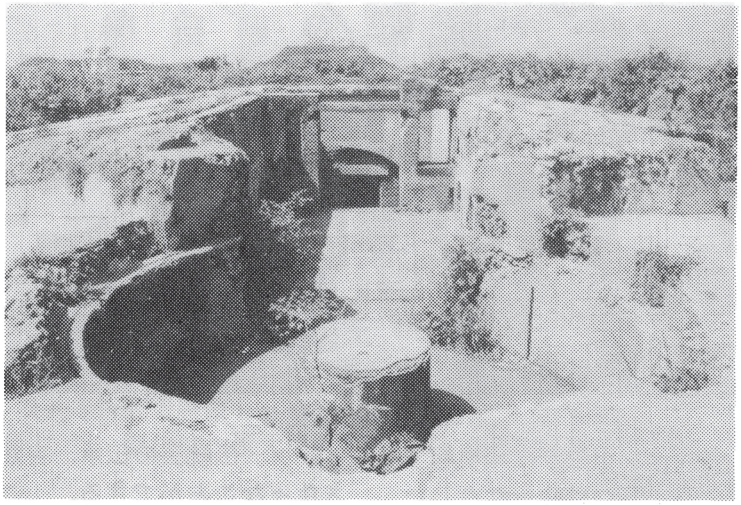
函館の石造アーチ橋は、全国的からみても、稀な事例の一つといえる。しかも現存するという事実も貴重である。

明治14年までに架設された36橋のうち、現存するのは、表－１にみるように、京都４、東京１、山形・福島７、長野１の13橋にすぎない。明治期の橋で現存しているものが少ないだけに、白河橋の存在は貴重である。

白河橋は、函館公園工事の責任者であった浅田清次郎が寄贈したが、橋の工事にたずさわった石工や石の切り出し地などは不明と聞く。

３.「展望台はかつて砲台だった！」

今年の７月、訪函して見たのは、函館要塞跡である。去年来たとき、函館山の要塞を調査した報告書を入手したので、今回は、ぜひそれをみたいと考えていた。しかし報告書はどこかに紛れてしまい、今もって見つからないので、とりあえず印象だけを書いておこう。



説明板によると、函館山の要塞は、明治32年11月に完成し、敷地は千畳敷・谷地頭付近をふくむ16万坪。77ヶ所に地下壕や砲台が築かれたという。

今回見学できたのは、函館山の第二砲台と千畳敷付近の月見砲台および函館山展望台下の薬師岳砲台である。

函館山の第二砲台跡は、整備されて、人が見学できるようになっていたが、その他の砲台跡は、探すのにも結構骨が折れた。

通信施設のある月見山砲台は、最初は一門の跡だけしかわからなかった。小さいが、空間構成としては、見ごたえがあるものであった。いざ帰る段になって、通信施設の回りを歩いてみると、何と通信施設は、砲台を基礎代わりにしていることがわかった。しかも尾根づたいに深い堀割通路が設けられている大規模な要塞である。井戸もある。大部分は、草木が茂ってとても踏査できなかったが、整備すれば見事な空間と石組が出てくることはまちがいない。

薬師岳砲台は、山の頂が砲台になっており、堀割通路がぐるっと回りをめぐっている。弾薬庫の煉瓦の状態は、ここが一番いいようだ。ここにも井戸らしきものがあった。現在は、一部がハイキング・コースの展望台に利用されている。

３つの砲台跡を、夜をはさんで午後と午前、ほぼ一日かけてめぐったので、大体押さえるところは押さえた。最後に函館山の展望台でトイレを借りて、函館を後にしようと考えた。ところが、展望台の回りをよくみると、何とここにも各砲台でみたような石積みがあるではないか。展望台・駐車場・放送局をはじめとする函館山の施設は、砲台を基礎として建てられているのだ。

函館人には、当たり前のことかも知れないが、わたしには大きな驚きだった。しかし考えれば、見晴らしがきいて、展望台にするくらいだから、ここに砲台を据え付けぬはずがない。燈台（砲台）、元暗し。（たが展望台の従業員の人も、ここが砲台跡とは知らないようだ）

砲台跡を整備するにはいろいろ問題はあると思うが、構造物に着目すれば、お金に糸目をつけなかっただけに見事なものが多い。また歴史を語るときも、ものがなければその魅力は半減する。

元町、ベイ・エリア、五稜郭など、函館の魅力はいろいろあるが、今回の旅は函館の秘めた部分を捜しあてた気分であった。

表－１　石造アーチ橋の架設数と現存数
（明治14年まで。九州を除く）

都　府　県	架設数	現存数
京　　都	6	4
東　　京	１５	1
山形・福島	１３	7
長　　野	2	1
合　　計	３６	１３

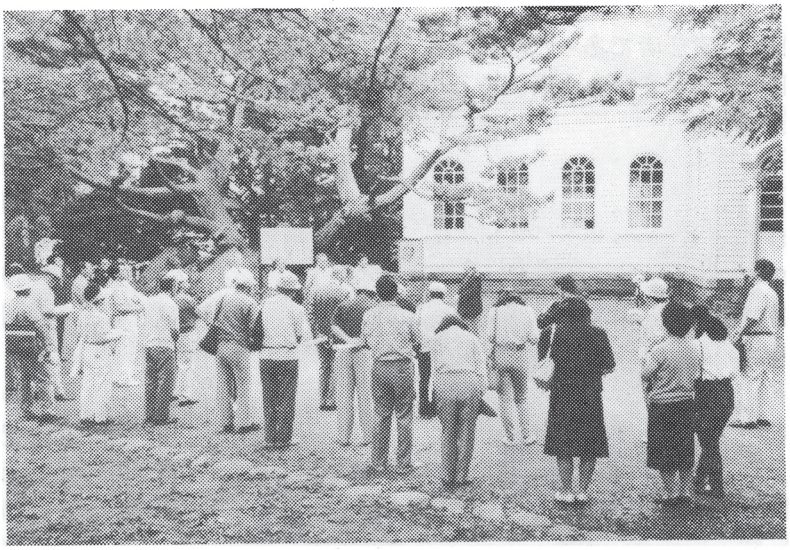
（伊東孝都市環境研究室代表
千葉大学・法政大学非常勤講師）

歴史的建造物勉強会に参加して

熊　谷　和　子

8月29日、歴風会主催の歴史的建造物の勉強会に参加した。そこで、現在使用されていない三つの建築と「大昔の函館展」を見学した。

まず、旧函館博物館一号館の中に入った。柱のない特殊な建築。展示のための自然光を採る大きな窓ガラスと高い天井のせいで、こじんまりとした外観のわりに思いのほか広々として明るい。当時の人々がここでさぞや知的興奮を味わったことだろうと思うと楽しくなった。古いものには我々の想像力をかきたてる何かがある。歴史的なものに込められた無限の情報の語りかけ。この旧博物館は時を越えたノスタルジックな夢がぎっしり詰まった小箱だ。それにしても、19世紀末の欧米の博物学の余波がこの地まで及んでいたとは…。当時の函館の先進性がこの建物に込められている。先人たちの偉大な精神を体現したこの建物を、なんとか生かせぬものか。



旧函館博物館見学

この思いは次の展示「大昔の函館展」を見た時、一層強くなった。これほど質・量ともに圧倒的な縄文土器は本州でも見たことがない。記憶の底に沈む原日本人のルーツ縄文は、太古へのロマンを限りなく喚起する。常設展でないのが残念。一つ一つにゆったりしたスペースと照明のある専門博物館だったら、恐らく全国から熱心な来訪者があるだろうし、研究もすすむだろうに。

じっくり鑑賞したかったが時間もなく、旧谷地頭小学校へ向かう途中、函館山の麓には水引きやツユクサ、キツネのボタンなど野の命が息ずいていた。ふと思った。函館公園と旧谷地頭小学校をつなぐ遊歩道を整備したら、温泉や岬も近いし格好の散歩道になるだろう。函館山の600種以上のユニークな植物が市民にとってもっと身近な存在になるように、写真パネルを展示した自然博物館に旧谷地頭小学校を再利用できたら、往年の函館の博物学の伝統も生き、谷地頭地区の環境の活性化にもつながるだろう。

やがて着いた旧谷地頭小学校は確かに古びてはいたが、波しぶきを表す玄関の白い玉縁飾りや波間より朝日の昇る飾り窓には地域性がよく表れていて、それを建てた人やそこで学んだ人の愛情が感じられた。廊下の天井の高いこと、特に木組みの体育館の天井は印象的だった。教室は昔ながらのガラス張で中の活動も中庭もよく見えて明るい。

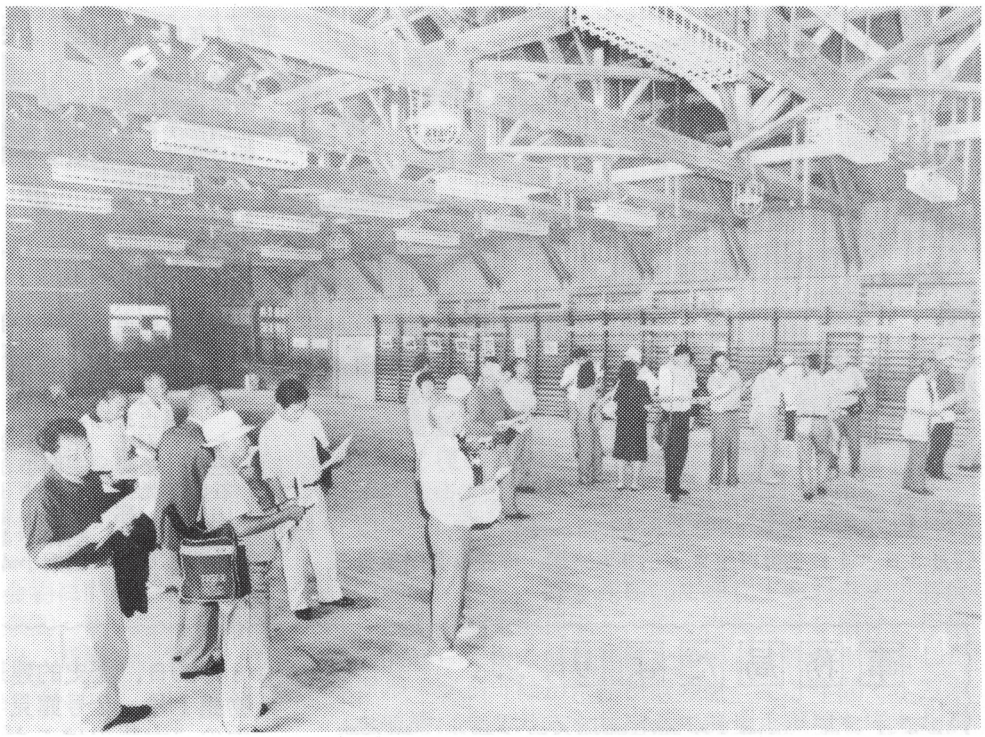
内部を見学するうちにも、再利用の道は色々と浮かんだ。たとえば国内や世界の町並み保存の様子を展示した建築博物館。国際交流・文化理解の場にもなり、より良い街づくりにかける人々の活動の拠り所ともなろう。また、半世紀以上の伝統を持つこの校舎には世代を越えたたくさんの人々がさまざまな思い出を持っているだろうから、ここを生涯教育の場にという構想も当を得ている。学校週休二日制の児童受け入れの場として、ここを解放し広く世代交流に役立てることもできるだろう。教室は市民や子供たちの発案を中心に構成し専門家をオブザーバーとして委託しバックアップしてもらって運営する。陶芸や工芸のワークショップ、伝統芸の伝承、自然・地域探究、運動やダンス色々なことができる。

食堂や中庭、暖房等の設備を整備し、憩いの場＝コミュニティとしての機能づくりも重要だ。木造の空間がより親しまれるように、玄関の白い玉縁飾りを廊下の天井にも取りつける、照明を工夫し、全体を明るい茶と白に塗り変えるなどすれば、建物の個性も生きて見違えるように美しくなるだろう。そうして愛し大切にされた建物が、今度は個性的な愛情深い人間を育むのではないか。

旧谷地頭小学校の保存・活用を進めようとしている人々は、街を重要文化財の博物館にしようとしているのではなく、まして観光客を当て込んでいるのでもなく、ただ純粋にこの街を自分達が愛着を感じられるコミュニティにしたいと願っているのだと思う。自然や伝統を否定し近代的な価値観のみで建物を作ってきた

結果、多くの人々が街に疎外感を感じている。そうした虚無的な空間を物語に満ちた暖かい空間に変えるのは、その土地を愛し、生活した年月だろう。旧谷地頭小学校もそうした住民の歴史の一部なのだ。

埼玉県入間市には、日本の古い建築を模した木造校舎の高校がある。これを建てた世界的に有名なカリフォルニア大学環境デザイン科のアレグザンダー教授は「建築とは命を育む構造で、自然や伝統的なコミュニティーの中には必ず存在していた」と言っている。設計に当たっては、その環境・歴史・風土を徹底して調べ、人と人とがそこでどのような関係を結べるのかを何よりも重視する。効率や経済性を追及するだけではいい環境をつくれないということは、先進的な建築家の間では今や共通の認識だ。



旧谷地頭小学校体育館にて

明治初期、いち早く博物館を解放したという先進性こそ、函館の伝統ではなかったのか。それを今一度行政に期待したいと思った。

アンケート結果のお知らせ

会員の意見等を聞かせていただき、会の運営資料にする「アンケート」の集計がまとまりました。この調査は、全会員を対象に行い、９月15日の締め切り以後着信分も含め、回収率は27％と低調でしたが、自由記述欄で貴重な意見、アイデア、感想などが寄せられました。早速会の運営に役立てたく思います。

※紙幅の都合で設問の回答(a)～(f)の内容は省略します。

「1」**今後の催し物は、どんなものを？**の設問で、○印が多かったのは、(a)これまでに進めてきた方針でよい、が24。以下(c)外部のグループと交流会、10。(b)と(d)が各４。(f)３。(e)１でした。

「2」**活動を活発にするためどんなことを考えるべきと思うか**、(a)会員の拡大を、(d)シンポジウム等の開催、各15。(c)これまでの方針でよい、が14。(b)が２、(e)(f)各１でした。

「3」**会報の編集に望むことは**、(a)これまで通りでよい、が18。(d)テーマで募集、会員に呼び掛ける、が11。(c)短文の欄を増やし、易しく、が８。(b)が３。(e)が２。(f)が１でした。

「4」**歴史的環境保全等の会の取組みにどう思うか？**(a)賛成のものが多かった、が22で、(c)話し合いで決まった方針だから良い、が10。(d)が４、(b)が３、(e)が２、(f)が０。

「5」**総会に出られない会員の考え等をいかに反映すれば良いか**、(a)これまで通りでよいと思うが17、(c)運営委員会に機能してもらうしかない、が11、(b)が７、(d)が５、(e)が２、(f)が１。

設問の「６」は、函館市内34、札幌市内２、渡島管内（函館を除く）３、道外及びその他各１人でした。

年代は、60才以上の男16人、女12人、50～59才の女６人、男５人、40～49才の男２人、30～39才の男２人。

会員歴発会以来18人、６年以上12人、５年未満11人

集計資料は、10月末に開かれる運営委員会に報告され、審議される予定になっています。

「自由記述」で寄せられた内容についても、今後の会報で紹介する予定です。ちなみに設問「４」について「意見・異論のある場合、随時、封書等で受付ける旨を報じてはどうか」（函館・60才代の女性）の声がありました。

会報の編集担当者は、会員からの原稿を大歓迎しています。意見・異論・反論・肯定論も寄せて下さい。

（事務局より）

10月３日・４日小樽再生フォーラム来函、町並み見学風景

平成４年度　第12回　ふるさと写生公募展入賞児童・生徒名

函館市長賞	滝口　順子	昭和小５年
函館市教育委員会賞	須藤　聖	深堀中２年
函館市美術教育研究会賞	三浦　大	深堀小５年
朝日新聞社北海道支社賞	吉田　愛美	深堀中２年
毎日新聞社賞	佐藤まりえ	深堀中１年
読売新聞社賞	鈴木こういち	昭和小２年
北海道新聞社賞	長嶋　栄治	昭和小４年
北海タイムス社賞	たにふじたくや	昭和小１年
ＮＨＫ函館放送局	山崎由美子	深堀小６年
	和高　修久	昭和小６年
ＨＢＣ北海道放送株式会社賞	須田万里江	深堀小５年
函館プロモーションビューロー賞	川島　敬史	昭和小６年
	藤田　建	深堀小３年
函館の歴史的風土を守る会賞	さいとうのりかず	昭和小１年
もとろくみほ　昭和小２年	吉田ゆうや	昭和小２年
三沢　千尋　深堀小３年	髙岡　邦行	深堀小４年
谷山　光行　深堀小３年	坂口　弘泰	万年橋小４年
山岸　都　昭和小４年	木村その子	万年橋小４年
木村のりこ　昭和小４年	信田　泰子	深堀小５年
本沢もも子　深堀小４年	佐々木貴恵	昭和小６年

事務局だより....

☆７月１日、平成４年度定期総会終了報告（総会資料）と会報41号を発送

☆７月14日、顧問（前副会長）會田金吾さん（75才）が逝去されました。当会発足以来役員として会の発展のため尽くされました。又函館市文化財審議会の委員として文化遺産の保全など多くの業績を残されました。お通夜、葬儀には会長はじめ会員多数が出席しました。会として弔意と弔辞を捧げました。

☆７月18日、第12回ふるさと写生公募展に関する諸手続き完了（幼・保・小・中・高校に要項発送、後援依頼状発送など）

◇公募展　10月１日～６日

◇会　場　和光デパート６Ｆ

☆８月１日、函館市旧イギリス領事館（開発記念館）竣工記念式典・祝賀会に浜島会長出席、函館市長から当会に感謝状が贈呈されました。（昭和57年７月24日旧イギリス領事館の保存・整備のため15万円を寄付しました）

☆８月10日、函館市都市景観委員会が設置されました。同委員会の委員に工藤光雄事務局長が委嘱されました。この委員会は函館市における都市全体の景観に関して検討を行うために設置されました。

☆８月20日、会員が当会に対し、どんな意見・希望等をお持ちなのか知るためのアンケートを行うこととし、その調査の具体的内容に就き話しあった。

☆８月25日、第３回ウォーターフロントフォーラムin函館（㈱ウォーターフロント開発協会主催）が、ハーバービューホテルで開催、工藤事務局長が出席しました。このフォーラムは港湾民活事業関連の集まりであり、各地の事例発表があり、函館においては港湾整備とのかかわりの中で函館シーポートプラザ周辺の整備、ウォーターフロントロードの造成など早急に着手するべきであると感じた。

☆８月29日、歴史的建造物の勉強会開催、旧函館博物館１号・２号館見学（尾崎学芸員案内）。開催中の“大昔のはこだて”を見学（田原学芸員案内）後、保存か解体かでゆれる。旧谷地頭小学校に移動。校舎を見学し、体育館で北海道教育大学教授奥平忠志先生の講演（文化財について）をいただきました。参加者の意見開陳もあり有意義な勉強会でした。参加者50名

☆８月30日、会の運営に資するためのアンケートのお願いと、旧北海道庁函館支庁庁舎の復元、歴史的町並み基金造成のため作成した絵葉書写真集の頒布方につき会員宛発送。

☆９月２日、岡田新一様（㈱岡田新一設計事務所社長）から、旧北海道庁函館支庁庁舎の復元資金として10万円をいただきました。

☆９月３日、日野栄之助様（函館）から、旧北海道庁支庁庁舎復元資金として１万円いただきました。

☆９月５日“横浜水際会議”　’92全国ウォーターフロントサミットに浜田昌夫、幸 夫妻、佐々木正子さん、斉藤サダさん、工藤事務局長が出席しました。概要別掲

☆９月24日、第12回ふるさと写生公募展応募作品審査（応募作品100点）

☆10月１日～６日、第12回ふるさと写生公募展
和光ビル６Ｆギャラリー

☆10月３日、第12回ふるさと写生公募展表彰式
（入賞者別掲）

☆10月３日・４日、小樽再生フォーラム（議長 篠崎恒夫先生）一行30名が函館を見学の為来函されました。３日宿舎で懇談夕食会を開催（浜島会長外６名出席）、４日西部地区、ウォーターフロント、五稜郭を案内いたしました。

【編集後記】

伊東先生はじめ、ご執筆下さった皆様へ御礼申します。次号会報のための原稿締切りは、１月15日頃です。是非原稿をお寄せ下さい。期待しています。　（田尻）